ただの、どこにでもいるふつうのメイジですからっ!

普通

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ただの、どこにでもいるふつうのメイジですからっ！

【Ｎコード】
Ｎ９４３６Ｙ

【作者名】
普通

【あらすじ】
ありがちなゼロ魔にオリ主転生モノ。本人は主人公になどなりたくないけど、うっかり首を突っ込んでは途中で引けなくなるタイプ。原作のことは遠い記憶の彼方で、朧げな記憶を頼りに、原作どおりになるようしようと頑張れば頑張る程、明後日の方向に事態は進んでゆく。主人公の座右の銘は「明日から頑張る。」
チート具合はテラチートという言葉も生温いぐらいのチートなのでドン引きするかもしれません。さらに基本的にオリ設定の嵐です。
こんな地雷いっぱいのｓｓですが読んでくれる人がいたら嬉しいで

す。

普通に原作開始

ここはハルケギニアはトリスティン、由緒正しい貴族の子弟の魔法の学舎、トリスティン魔法学院。
今日は2年生に進むために必須である、春の使い魔召喚の儀式が執り行われている最中です。
私は所謂ところの転生者とかいうもので、なんと驚き、前世の記憶を持っています。その前世の記憶の中では、この世界はゼロの使い魔というライトノベルとして登場していました。
ここは魔法を使えるメイジという人たちが存在し、中世レベルの文明で、貴族が絶大な力で平民を支配し、亜人や幻獣が跋扈する一級危険世界なのです。それも、私が生まれたトリスティンという国は、伝統があるもののちっちゃくて弱っちい国家、それも物語の中では主人公達が活躍しなければ滅んでしまう程です。

私が最初にこの世界が”あの”ハルケギニアだと気づいたときは、貴族の家に生れたことを神に感謝し、もし魔法学院に行って物語の”ヒロイン”であるルイズ・なんとか・アリエール嬢がいたりしたらどうしよう、と悩んだものです。
もちろんいましたよ、隣のクラスに。神って呪い殺せるんでしょうか？

”原作”の冒険に巻き込まれないよう仮病をでっちあげて、2、3年の間学院を休学しようとも考えましたが、私の家がある以上、ここは物語とは違う平行世界ということになります。もしそのせいで物語どおりに主人公が現れず、ヒロインが覚醒してくれないと、私の国はなくなってしまい、家も潰れてしまいます。
流石に中世レベルの文明で平民暮らしなんてゴメンなので、すごく、

すごーく気が進まないのですがヴァリエールさんが伝説の使い魔・ガンダールヴの斎藤を召喚して、伝説の系統・虚無に覚醒するまで影からこっそり見守ることにしました。ええ、見守るだけですとも。

「儀式、次。」

なんかちんまい青髪の少女にクイッとマントを引っ張られたような気がしますが、きっと気のせいです。

「風竜を召喚するなんて、さすがタバサね！　私も火竜呼べるかしら？」

「きゅいきゅい。」

ウキウキしながら杖をぶんぶん素振りしている褐色肌に赤髪のグラマラスなおねいさんと、独特の啼声をするドラゴンが視界の片隅にいますが、これもきっと目の錯覚でしょう。

物語はこの使い魔召喚の儀式から始まっていましたが、よく考えればごく当たり前のことですが、その前に一年間同じ学院で暮しているのですから、関係者にエンカウントするのは当然なのに。

そもそも十年以上前のアニメの内容なんて細かく覚えていないのは当然じゃないですか！　しっかり覚えているのは胸革命（バストレボリューション）と日野理恵ラジオによく萌えたことぐらいですよ！

私のゴロゴロハルケギニアライフ計画を危険イッパイワクワクハルケギニアアドベンチャーにさせないためにも、頑張らなくては。明日から。

「人生諦めが肝心。」

雪風のように冷たく鋭い言葉で私の現実逃避を一刀両断する青髪の少女に促され、私は広場の中央に進み出ます。

「我が名は、エドモン・ディチロ、五つの力を司る五角形(ペンタゴン)、我に相応しい使い魔を召喚せよ。」

銀色の人間大の鏡のような扉(ゲート)が宙に浮かぶ。

私の中で運命の扉がギシギシ音を立てながら開いた、そんな気がした。

普通の使い魔（だったらよかったのに）

銀色の鏡から現れたのは、散切りの黒髪に神経質そうな目をした、細身の中年の男性だった。
男は白のマントらしきものを着けていたので、ギリギリ貴族に見えなくもないが、とにかく身なりからして怪しいのだ。
ゴツイ竜革らしきブーツを履き、真っ黒なゴム製の分厚いエプロンをかけ、目元を広く覆う大きな眼鏡をかけている。極めつけは、貴族の象徴たるマントには小物を入れるポケットのようなものが設けられている。それも、いきなり召喚されたにもかかわらず、男はそれを気にした様子もなく、手に持っていたノートにペンで何かを書き込み続けている。

儀式を監督する立場であり、立会人でもあるコルベール教諭も、先ほどから男の振る舞いに呆然としている。すっかり静まり返ってしまった広場には、風の音と男がペンを走らせる音が妙に大きく響く。そんな緊張の糸を切るかのように、再起動を果たしたコルベール教諭が男に声をかけようと一歩を踏み出したところで、機先を制するように男はノートから顔を上げ、姿勢を正して口を開く。

「久しいな。」

その言葉は、ハッキリと私に向けられたものだった。なぜか、コルベール教諭の肩が一瞬ビクリと跳ねたように見えたが、私は気にせず男に返事をする。

「はい、父上。一年ぶりになります。父上は相も変わらず不健康そうな生活をしていらっしゃるようで何よりです。」

「ふん、貴様とて大差は無いだろう。休みにも顔を見せないで何をやっているのかと思えば、転移魔法（テレポート）でも使えるようになったのか？」

私が召喚した男の名はトゥーサン・ディチロ、私の父であり、イチロ伯爵家現当主殿である。

昨年の長期休暇に帰省しなかったことに未だ御立腹なのか、言葉が刺々しい。

「いいえ、ただの召喚（サモン・サーヴァント）ですよ。全く、何がどうなっているのやら。是非解剖して調べさせて頂けませんかね。」

「ふむ、魅力的な提案だが、丁重に断らせてもらおう。使い魔のルーンは心臓が止まると消えてしまうらしいからな、やるだけ無駄だ。」

「ちっ。」

私達親子の心暖まるやりとりに中てられたのか、周りがまた空気になっている。そんな空気を打ち壊すかのように、明るい若い女性の声が割り込む。

「へいへーい、今日の主役のこの私、スーパーキュートなアンブレちゃんを無視しないでください。いい加減私も怒っちゃいますよー？」

私の使い魔らしき奴は、とうとうプンプンという擬音を態々魔法で宙に描いたりし始めている。

いや、先ほどからピカピカ発光してしきりに存在をアピールしていたのだが、親子そろって無視していたのだ。

父の右手に納まっているペンは、その名をランブレという。イチロ家に伝わる由緒正しいインテリジェンス・スタッフであり、性格はあんなんだが、一応、代々イチロ家の当主の杖を務めているのだ。

父と私は疲れたように額に手をやり、同時に溜息をつく。しかし私は、父の口元が一瞬ニヤけるのを見逃さなかった。ランブレを厄介払いできるのが其れほどまでに嬉しいらしい。その気持ちはよーくわかる。

「さあさあさあ、私達の熱いヴェーゼ（コントラクト・サーヴァント）を皆さんに見せつけてやりましょう！　エド君のファースト・キス（純潔）を散らすのがアンブレちゃんになるなんて予想外の展開ですが、ダイジョブ！　ミネットちゃんには内緒にしておいてあげますから！」

この性格さえ無ければ優秀な杖なのに、こいつを作った奴は何を考えてこんな性格にしたのか。ただでさえ原作開始を思うと今日から憂鬱なのに、コイツの相手が加わるなんて。

何時も暇を持余しているランブレのことだから、これからの数々のイベントに出会うたびに事態を面白可笑しくする方向に尽力するに違いない。さすがにトリスティンが滅ぶような場面では遊ばないと思うが、平穏な日常からは物凄い勢いで遠ざかっている気がする。

悟りの境地ってこんな感じなのかな、と穏やかな笑みを浮かべながら、私は投槍にコントラクト・サーヴァントを唱えてランブレにキスをした。

「内緒も何も、ミネットは今年から学「しゅごぉい、エド君の熱い（精神）のがアンブレちゃんのナカ（カ）に入ってくるぅ」院に通っているぞ？明日には知れてるんじゃないか？」

「は？」

「貴様まだミネットと顔を合わせてないのか？　もう入寮して2週間は経っている筈だぞ？」

父上の言葉に一瞬で現実に引き戻される。ハトコであり私の婚約者でもあるミネット・ド・シロー・ジロは、学院は通わない予定だったはず。というか、私が学院を卒業と同時に入籍というスケジュールまで決まっていたはずが、一体どうなっているのか。
原作（大冒険）イベントにあの御転婆（アクティブ）な少女の世話まで加わるなんて悪夢のような未来予想図に、溜息が零れる。

「ちょっと父上とＯＨＡＮＡＳＨＩがありますので、今日はここで早退させて頂きます。」

再び固まったまま唖然としているコルベール教諭にそう断り、父を連れて立ち去るのだった。

あれ？　今日の目的ってヴァリエールさんがちゃんと斉藤君を召喚できるか確認することじゃなかったっけ？

普通の婚約者　前編

父とのＯＨＡＮＡＳＨＩは流れてしまった。というか、父の杖は私が貰ってしまったのでそもそも勝負が成り立たない。その父は隣で使い魔を通して王都トリスタニアまで迎いを出させ、さっさと帰る算段をつけている。将来の義理の娘も居るのだし、顔ぐらい見せていっても良いのに、そんな気は更々ないようだ。
父を厩舎まで送った別れを告げた後に、私は真っ直ぐ一年生の授業が執り行われている教室へと向かった。どうせヴァリエールさんのサモンサーヴァントで今日の授業は殆ど潰れるのだ、少しぐらい寄り道しても問題ないだろう。

一年の教室の前に着いた時は、丁度今日の授業が終わったところのようで、教科書や筆記具を抱えた、まだ茶色いマントの一年生達を教室の扉からぞろぞろと吐き出している。
その中に、ダークブロンドのポニーテールを腰まで伸ばした後姿を見つける。多分、あれがミネットだろう。トリスティンではあそこまで暗い色は珍しい。一年前の冬に見た時よりも若干色合いが濃くなっているが、うちの連中ならばまだ薄いぐらいだ。

「ミネット。」

「お兄様、お久しぶうございます。」

私の呼びかけに答えて小柄な少女が優雅に振り向き、スカートの隅を摘まみつつ澄んだ声色で挨拶を返す。釣り目がちの漆黒の瞳にキリッとした眉、そして、その鋭さを打ち消すような優しげな微笑みを浮かべた少女がそこにいた。

「だ、誰だてめぇ！？」

思わず言葉遣いが乱暴になってしまった。だが、私は今、何らかのスタンド攻撃を受けているッ！　姿形は一年前のミネットをそのまま拡大コピーした様にそっくりだが、キャラが可笑しすぎる。断じてうちの婚約者殿は優しい微笑を浮かべて御機嫌ようとか挨拶するタイプの人間じゃねぇ。

その証拠に、さっきはミネットには内緒と言いながら、実際に本人に会ったら無いこと無いこと吹き込む気だったランブレも、あまりのことに完全にフリーズしている。

そうだ、この子、食堂とかで何度か見掛けたことがあった。誰かに似ていると思っていたんだが、キャラが違い過ぎて良く似た別人だと思っただけだったんだ。

混乱で完全にフリーズしている私に業を煮やしたのか、ミネット（？）は徐に杖を取り出すと、呪文を唱え、正気に戻った時には私達は窓から飛び出していた。この魔法行使は覚えがある、やはり間違いなく、私をお姫様抱っこしてニヤついているのは正真正銘ミネットだ。

背後から上がるキャーという黄色い歓声は極力気にしないことにした。

五階の寮塔の部屋に窓から入る。ここがどうやらミネットの部屋らしい。デカい氷室に、窓まで続いているダクト。刃物や工具が詰まっているラックに、大理石、木、金属と三種類も用意されている、一見無駄のようにも見える作業台。その上には魔法のバーナーとサラマンダー革のゴツイ手袋が無造作に置いてある。まるで自分の部

屋に帰ってきたような気分だ。寮室をこんな風に改造するのはうちの人間ぐらいだろう。少なくとも一般的な女の子の暮らす部屋ではない。

「で、お兄様ってどこの誰だ。熱でもあるのか？」

「お兄ちゃんって呼ぶとセンパイが喜ぶってお義母様が言ってたんだケド。」

心外だという顔をしてぷぅっとふくれるミネットさん。婚約者として張り切ってくれるのは嬉しいが、お前、方向性はそれでいいのか？　それよりも母上（クロエさん）ミネットに何吹き込んでんすかー。どうやら私は母に妹萌えだと認識されているらしい。確かに妹は猫可愛がりしているが、断じて妹萌えではない、はず。

「ふぃ～。今日も疲れた。肩がこるぜい。」

さっきの雰囲気とは打って変わって、仕事帰りのおじさんのようにぐるぐる腕を回しながらポスンとベッドに腰掛けるミネット。

「はっ、夢か。」

「夢じゃねーよ、センパイ。まぁ新学期早々にちょっとやらかして、今さら猫脱げねーんだよ。ほら、イトウだっけ？　何かにつけてはイチイチ風が最強とか言う教師知ってる？」

「ギトー先生だ。ここの教師陣はだいたい皆、自分の系統こそが至高だと思っているが、声高に主張して憚らないのは彼ぐらいのものだ。まぁ、あれでも偏在が使えるんだからそうなるのもしょうがないとは思うが。」

「でさ、うちのクラスの娘がネチネチいじめらわれて泣かされちゃってさ、つい、ね？　学生相手だからといって、あんまり舐めた授業してると足元掬われますよって、それとなく注意を促してみたのよ。」

「ね？　じゃねーよ！　この間の風系統の授業が急遽無くなったのお前のせいだったのか。それとなくって意味、ちゃんと解ってるのか？」

「まぁその件でクラスのヒーローみたいになっちゃって、庇った娘からはなぜかキラキラした瞳で御姉様とか呼ばれるようになってさ。いまさら地がこんなんだって言い出せねーんだよ。まぁ、アタシの話はこれぐらいでいいじゃん。それよりセンパイたち二年生は今日は使い魔召喚の儀式だったんだろ？　こんなとこで油売ってていいの？」

「これぐらいって、はぁ、入学一月目でこれか。なんだかつつけばもっと出てきそうだな。」

あからさまに話を逸らされたが、まぁ、人間知らない方がいいことって世の中あるよな、うん。学院に入学した直後、オールド・オスマン直々に呼び出され、君はくれぐれも自重するようにと必死に釘を刺された理由が、今さらながらなんとなく察せられた。きっとうちのＯＢの連中はこんなのばっかりだったんだろう。
私は知らなかったんです！　よし、理論武装完了。何かあったら全部父上に丸投げしよう。

「使い魔召喚の儀式は長くなりそうだから自主休講になったんだよ。それで私の使い魔だが、」

「呼ばれて、飛び出て、ジャカジャカジャーン！　アンブレちゃん登☆場！」

勝手に持って行った人の精神力で、これでもかという程の魔法で光る星を散らしながらランブレが名乗りを上げる。

「お義父様の杖？」

「そのとーり。今日からはエド君の杖兼使い魔兼終生の伴侶ですけどね☆」

「伴侶って間違っちゃいないが、はぁ。」

「あれれ、反応薄いですよー、ミネットちゃん？　もっと、こう、キーッ悔しぃ、ドロボー猫め！　みたいな反応してくれないとアンブレちゃん楽しくありません。」

「や、だってランブレ、その、杖じゃん、なぁ？」

「くぅ、それは気にしたら負けです。」

「それに齢４５００歳のババァだし。」

「アンブレちゃんは永遠の十七歳なんですー！」

そう叫ぶと、ランブレは私の精神力を使ってフライの魔法で窓から飛び出して行ってしまった。つーか、ミネットも杖の戯言ぐらい聞き流せよ。変なところで負けず嫌いなのは変わらないな。あっという間に見えなくなる新しい相棒を見送りながら、きっと明日には『

怪奇、空飛ぶペン』なんて噂が流れるんだろうなとボンヤリと考えた。

普通の婚約者　前編（後書き）

メインのオリキャラはこの３人（？）でひとまず終了です。次回はバトルパートの予定。
主人公の親類縁者はチョイ役や番外編があれば出てくるかもしれませんが、何時になることやら。
設定資料集と登場人物紹介を整理していたらいつのまにか４０ＫＢを超えていたので、全部出てくることは多分ないですが。

普通の婚約者　中編

一体何でこんなことになってるんだか。やれやれだぜ、とどこかのスタンド使いのようなセリフが漏れる。
今、私は『風』と『火』の塔の間、ヴェストリの広場の真ん中、数多の野次馬に囲まれている。目の前に対峙するは、我が婚約者ミネットさん。わけがわからないよ。

事の起こりはこうだ。ヴァリエールさんにご飯を抜きにされたらしい彼女の使い魔君を可哀想に思ったメイドさんが食堂でご飯を食べさせてあげ、そのお礼として使い魔君は仕事のお手伝いをしていたそうだ。なんだそのリア充みたいなフラグの立て方。
そんな親切な使い魔君はギーシュ君の落とし物を拾ってあげたそうだ。しかしながら、その落とし物の香水を発端として、みるみるうちにギーシュ君の二股が発覚。ギーシュ君はやり場のない悲しみを目の前にいる使い魔君に八つ当たりして発散しようとするが、自分以外のリア充は許せない使い魔君はギーシュ君を挑発、結局、決闘沙汰に相成りましたとさ、まる。

昼食後の暇つぶしの散歩をしていたランブレによるとそういうことらしい。ここまでは、なんか記憶と展開がちょっと違う気もするが結果は問題ない。というか、その記憶自体もう結構テキトウなので次のイベントが確か盗賊編なのと、アルビオンにいってくるとタルブで飛行機にのったヒロインが覚醒、ぐらいしか覚えていない。しかし、続きが問題だ。

颯爽と食堂を去って行くギーシュ君。やっていることは二股野郎の

噂をもっとインパクトのあるイベントで上書きするという、とてもカッコイイものとは思えないものだが。しかし、そこに立ちふさがる影が、二つ。

「いやぁ、カッコイイですね、グラモン先輩。」

女の子にカッコイイと声をかけられ反射的ににやけてしまうギーシュ君。しかし、次の言葉を聞いた瞬間、その顔は真っ赤になり、声をかけてきた少女の後ろを見て青くなる。

「なにせ、二股かけて女の子を泣かせておいて、礼儀を教えてやろう、ですからね。礼儀知らずな私にはとてもできないことです。そういえば、恥かしながら浅学な私にはグラモン先輩の仰る薔薇の存在の意味というのも、とんと理解できないのですが、これも丁度いい機会ですから、そこのヴェストリの広場で合わせて御教示願えませんか。」

慇懃無礼にそう言い放つ小柄な少女と、その少女の影に隠れるように、マントをちょこんと掴んでしくしく泣いている栗色の髪の少女。共に茶色のマントを付けた一年生で、ミネットとラ・ロッタ嬢だった。

ミネットは、御姉様格好良いとウットリとした表情で抱きつく、自分より大きな少女を、よしよしと頭を撫でてあやし、言うべきことは言ったと、さっさと踵を返して出て行ってしまった。

ギーシュも先ほどチラッとお互いの杖に送られていた視線から、ミネットが何を言わんとしているのかは理解できた。つまり、うちの娘泣かした落し前つけちゃる、決闘じゃ、ということなのだろう。しかも場所まで指定して。ここでヴェストリの広場に行かなければ、

彼女からだけでなく、平民との決闘からまで逃げたことになってしまう。しかし行けば、どちらが先にしろ結局彼女との決闘は避けられないだろう。弁解の機会は意表を突かれて固まっている間にすっかり失われてしまっているし、ギャラリーは既にギーシュを置いてきぼりにして盛り上がってしまっている。先ほどとは打って変わって、ギーシュはとぼとぼと食堂を後にした。

「とゆー訳なんですよ。いやー、ミネットちゃんは順調に御姉様化してますね。これで男の娘だったらパーフェクトなんですが、いやー惜しいことです。」

何時も通り、脳みそ空っぽで能天気なランブレの発言を総スルーしてヴェストリの広場に急ぐ。ここでギーシュ君がミネットにボコられて使い魔君の決闘イベントが起きないと、伝説の剣ストームブリンガーが手に入らない。原作2日目でもうトリスティン終了の危機とか冗談じゃない。決闘を治める良い方法なんてさっぱり考え付かないが、とりあえずランブレにフライを使わせ、文字通り飛ぶ様に翔けた。

ヴェストリの広場に着いた時には既に人だかりが出来ていて、その輪の中ほどには既にミネットが立っていた。私もフライでその輪の中に降り立つと、騒がしかった野次馬達が輪をかけて五月蠅くなる。ギーシュ君は丁度到着した所だったのだろう、目の前に降ってきた私と目が合い、ポカンとしている。私は運がいい、彼が呆けている間に言質を取ってしまおう。

「やぁ、ギーシュ君、いまから決闘らしいけど、調子はどうだい？」

「ああ、そうだねエド、悪くはないかな。」

ギーシュ君はどこか歯切れが悪そうに答える。まぁ、そうなる理由を私は知っている。

「君には悪いのだけれど、彼女との決闘は取りやめにして貰えないかな？　大丈夫、彼女には私の方で話をつけるよ。」

「や、でも、その。」

「ギーシュ君は女の子に杖を向けるのが嫌なんだよね？」

そう、どこか価値観がずれている所があるが、何だかんだでギーシュ君は基本的にこういう人柄なのだ。言葉に詰まるギーシュ君にさらに言葉を重ねる。

「実は、彼女、ミネットって言うんだけど、私の婚約者なんだ。もし彼女になにかあったら、とても悲しいことだけれど、私は君に決闘を申し込まなくてはならない。」

それを聞いてギーシュの顔が引きつる。私は昨年ギーシュと同じクラスだったので、彼は私が学年に3人しかいないトライアングルの一人だということ良くを知っている。相手は年下の女の子ということでただでさえ気持ちの乗らない決闘で、相手はやる気満々、しかも相手に怪我をさせたら2ランク上のクラスメイトとの決闘のおまけつき。

ちょっとした憂さ晴らしのつもりで始めたのだったのが、なぜか逆にストレスが溜まる一方だったギーシュは、ホッとした様な顔で肯く。

「じゃあ頼めるかい？　薔薇の棘は乙女の指を傷つけるためにある

訳じゃない。無粋に摘み取ろうとする不埒者を制するためにあるのだから。」

ちらっと、ヴァリエールさんの使い魔君に視線をやると、ギーシュ君はすんなり引き下がっていった。あとはミネットにアイコンタクトで退くように伝えれば万事が原作通り、丸く収まるってわけだ。

「あら、お兄様も二股かけて、恋人を泣かせるタイプの方だったんですか？　このミネット、とても悲しいですわ。」

藪蛇だった。ウルウルと涙目で悲しそうな表情を浮かべるミネット。でも、ちょうどいいからそのまま泣いた振りのまま走り去ってくれ。

「婚約者である私の側ではなく、グラモン先輩の方に立ったのが何よりの証拠、ええ、許せません、決闘を申し込みますわ！」

ダメだった。というか、何故そんな展開になる。確かにミネットとギーシュ君の決闘は回避できたが、代わりに私が決闘する羽目になろうとは。

先ほどの涙は何処にいったのだろうというぐらい鋭い表情をしたミネットが杖を抜いて佇む。

そして、時は冒頭に戻る。

よくミネットをみるとその口元はニヤケが抑えきれていない。恐らくミネットは、ギーシュ君との決闘が私にとって不都合なのを理解した上で、退く報酬として自分と決闘しろということなのだろう。

年々女の子らしさが消えていくミネットに呆れながらも、このまま私が退いて使い魔君の決闘も流れてしまっては元も子もないので、仕方なくランブレを構える。お互いの間に流れる空気が張り詰める。まるで時間が止まったかのように静まり返った中、二つの朗々とし

た声が響く。

「『幻惑』のミネット」
「『力』のエドモン」
「杖に誓い」
「いざ尋常に」
「「勝負」」

普通の婚約者　中編（後書き）

バトルまでつかなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9436y/

ただの、どこにでもいるふつうのメイジですからっ!

2011年12月7日03時52分発行